台大日本語文研究第 27 期
2014 年 6 月，頁 53-76
2014-03-31 收稿，2014-05-29 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2014.27.55

方丈記序章小考

曹景惠*

摘要

《方丈記》是由鴨長明（1155-1216）執筆，仿效『池亭記』所寫成的一種「記」的文學，文中顯示出作者長明的無常觀，爲日本鎌倉期初期具代表性的散文作品。諸多先學研究皆指出《方丈記》一書結構嚴謹，長明在撰寫該文時，應經過嚴密推敲與縝密思考才是。平安末葉至中世期的日本文人歷經時代激烈變動，除了佛教以外，亦試從各種書籍中尋求心靈的慰藉與依歸。本稿重新聚焦《方丈記》序章的內容，考察長明如何理解無常現世，並檢討中國文學對《方丈記》序章的成立扮演著何種腳色等問題。

關鍵詞：方丈記、歎逝賦、朝顏、槿、文選

* 臺灣大學日本語文學系副教授

A Study of the Prologue of Hōjōki

Tsau, Jing-huei*

Abstract

"Hōjōki," written by Kamo no Chōmei, is a short work belonging to "Ki" genre, following the pattern of "Chiteiki." It is a representative work of the early Kamakura period, showing the author's attitude toward impermanence. Many studies have indicated that "Hōjōki" is a well-structured book which should have been done with close scrutiny and careful thought. Experiencing the intense change of time from the late Heian period to medieval period, the Japanese literati turned not only to Buddhism, but also to a wide variety of books for comfort and mental support. This paper aims to refocus on the prologue of "Hōjōki," to examine Chōmei's comprehension of the impermanent world, and to study what kind of role Chinese literature played in this prologue.

Keywords：Hōjōki, Tanzifu, asagao, mukuge, Wen Xuan

* Associate Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

方丈記序章の一考察

曹景惠*

要旨

『方丈記』は鴨長明（1155‐1216）の手によって書かれた鎌倉期初期の代表的散文作品である。『池亭記』に倣って作られた「記」の文学でありながら、長明の無常観を示したものとして認識されている。多くの先学研究に指摘されたとおり、『方丈記』はまことに論理的にがっちりと構成されており、長明が執筆する際に、考えに考えを重ねたに違いないと思われる。平安末期から中世にかけての文人たちは激しい時代の移り変わりを経験し、仏教のみならず、様々な書物に心の拠り所を求めていたと思われるが、本稿は、『方丈記』序章にあらためて注目し、長明が無常たる現世をどのように認識し、そして中国文学が、『方丈記』序章の形成にどのような役割を果たしたかを考察するものである。

キーワード：方丈記、歎逝賦、あさがお、槿、文選

* 台湾大学日本語文学系副教授

方丈記序章の一考察

曹景惠

一、はじめに

『方丈記』は『池亭記』の構想と形式をかりて、その用語と措辞を随所にちりばめ、漢文訓読語、漢文訓読調の力強いリズムを駆使しながら、併せて歌語・雅語の積極的かつ効果的な使用による和文幽玄の体を志向した作品である。漢文脈と和文脈との長を最大限に発揮し、無常観にありふれた格調の高い和漢混淆文の達成に成功したと言われている[1]。作者鴨長明（1155-1216）が『池亭記』より大きな示唆を得ているものの、よく吟味してみると、『方丈記』と『池亭記』との大きな相違の一つは冒頭部にあり、そこには『方丈記』独自の世界が形成され、宣言されたように思われる。

「ユク河ノナガレハ、絶エズシテ、シカモモトノ水ニアラズ」[2]とはじまる『方丈記』の序章は、美文として、そして著者鴨長明の世界観を示すものとして広く知られている。冒頭には長明は、一見「絶エズシテ」、恒常・常住のように考えられる「ゆく河の流れ」に注目し、それをよく観照してみると、実は「モトノ水ニアラズ」という、変遷・無常の相が見出されると語り[3]、そして、「澱ニ浮カブウタカタハ」「ヒサシク留マリタルタメシナシ」とのように、無常の相を強調し、こうした無常の原理は「世中ニアル人ト栖」にも適用されるといい、同書の趣旨を掲示する。

冒頭の「ユク河ノナガレハ、絶エズシテ、シカモモトノ水ニアラズ」という一文について、『首書』『諺解』以来、多くの『方丈記』

---

1 佐竹昭広·久保田淳校注『方丈記　徒然草』新日本古典文学大系 39、東京：岩波書店、1989 年、p.371。

2 本論での『方丈記』の本文は、大福光寺本を底本とした『方丈記　徒然草』新日本古典文学大系 39（佐竹昭広·久保田淳校注、東京：岩波書店、1989 年）に拠った。

3 久山善正「方丈記冒頭文の解釈－『しかも』を中心に」『国語国文』46（5）、1977 年 5 月、pp.466-479。

注釈書は『論語』子罕篇の「子在川上曰、逝者如斯夫、不舎晝夜」という章句を典拠としてあげている。しかし、『首書』では、「長明此語に本づきて書いだしたり。され共論語とこゝとはいささか心ちがへり。孔子は道の体を水のやむことなくながるゝをかりて、たとへ給へり。長明は、世中の人もすみかのつねならぬことを、水の上のあはのはかなきことをかりてたとへたり」として、『方丈記』と『論語』との違いを指摘している。また、『諺解』においても、『論語』を引用した後に、「此語に本づきてかけるなるべし。然れども、こゝろハ論語と各別なり」とする[4]。

一方、『十訓抄』下九ノ七では、「方丈記とて、仮名にて書き置けるものを見れば、はじめの詞に、 行く水の流れは絶えずして、しかももとの水にあらずとあるこそ、世閲人而為世　人苒々行暮　河閲水而為河　水滔々日度　といふ文を書けるよ、とおぼえて、いとあはれなれ」[5]とのように、『方丈記』冒頭文の直接典拠は『文選』「歎逝賦」であるとする。『十訓抄』は『方丈記』の脱稿（建暦二年 1212）より四十年ほど遅れ、建長四年（1252）に成立した説話集である。『十訓抄』の著者は上引した文言のように、出典という程度で『文選』「歎逝賦」を指摘したが、細野哲雄氏は「従来、単に出典といった程度に軽く取り扱われていた両者の関係が、実はもっと緊密なものである」と考え、「全体の構文の骨組」、つまり作品構造において「歎逝賦」と『方丈記』との「似通い」が見出されると指摘した[6]。

また、簗瀬一雄氏は、長明が『論語』と『文選』、またはそのどちらかの一つによって、序文を成したかと推定しつつ、「『十訓抄』が「歎逝賦」をあげていることに注意すると、中世の文化人には、「歎逝賦」のほうが『論語』よりも『方丈記』に密着するものと考えられたらしい。また、「歎逝賦」の抄出の範囲だけを見ても、『方丈記』

4　簗瀬一雄『方丈記解釈大成』東京：大修館書店、1987 年、pp.9-10。
5　浅見和彦校注・訳『十訓抄』新編日本古典文学全集 51（東京：小学館、1997 年、p.381。
6　細野哲雄「『方丈記』と『歎逝賦』」『国文学：解釈と教材の研究』10 巻 9 号、1965 年 7 月、p.75。

の後の部分に関連させることのできるものが存することは明らかであるから、「歎逝賦」をより直接するものと、見るべきである」[7]と述べている。

本稿では、細野哲雄氏や簗瀬一雄氏の指摘を踏まえつつ、『方丈記』の序章にあらためて焦点をあて、その言葉綴りや文言の組み立て方を検討することによって長明の無常の捉え方とその発想の源泉について再考察してみる。

二、『方丈記』と「歎逝賦」との類似性（一）

『文選』は梁武帝の長子である蕭統（昭明太子）（501－531）が、紀元前五世紀の東周から紀元六世紀に至るまでの優れた文学作品を網羅、編纂した、中国現存最古の文学選集である。約八百編の詩文が文体別・時代順に並べてあるが、三十七種の文体の中、最初に位置するものが「賦」であって、六朝時代における「賦」の重要性を自ら示している。そして、「賦」の下に分けてある、十五の「類」の中に、「京都」類の九首に次いで、二番目の多いものが「哀傷」類であって、計七首収録している。「哀傷」類の「賦」を多く取り入れているのは、魏晋南北朝時代の政権更迭が多く、政局混乱のせいで文人たちが安定した生活を確保できず、親族や旧友の急逝を目にしたり、命の脆さ・世の中のはかなさを実感し、哀情を詩文に寄せずにはいられなかったことと極めて密接な関連が認められるであろう[8]。

「歎逝賦」は『文選』巻十六「哀傷」類に属するものである。「歎逝賦」の序によると、「余年方四十、而懿親戚屬、亡多存寡。暱交密友、亦不半在」とのように、「歎逝賦」は陸士衡（陸機）が四十才を迎えた年に、ふと気付けば親戚や親しい友人達に次々と亡くなられてしまい、人の命の短さを痛感させられ、かかる心情を詩文に賦し

[7] 簗瀬一雄『方丈記全注釈』日本古典評釈・全注釈叢書、東京：角川書店、1971年、pp.16-17。
[8] 林登順「由文學《哀傷賦》探析六朝生命意識」「遠東通識學報」第二卷第二期、2008年7月、p.4。

たものである[9]。冒頭に自然推移の実相を語ったうえ、「嗟人生之短期、孰長年之能執。時飄忽其不再、老晼晚而將及」云々との詩句が示す如く、人間も永久の生命を保つわけにはいかないことを説き、川の流れによって人生流転の相を思い、過去をふりかえっては世の中のむなしさを深く嘆息せざるをえないという。かつて繁栄し、代々伝えられてきた「堂構」「城闕」などの建物がしだいに崩れて荒廃し、親しき親戚も旧知も相次いで亡くなっていき、いまは百人の中に僅か一人二人しか生き残っていなく、自分もやがて死ぬはずである。しかし、いたずらに世のむなしさを悲しむことの愚かさを悟るべく、末尾には「將頤天地之大德、遺聖人之洪寶。解心累於末跡、聊優遊以娛老」とのように、天地造物の理法を会得したうえ、世間の名位を忘れ、心にかかる煩わしさを解き放ち、悠々自適たる老い先を楽しもうと、一文を締め括る。

亡くなった親友たちへの哀悼の情が「歎逝賦」の出発点であって、創作の第一モチーフであることと言ってもよいと思われるが、『文選李善注』[10]では、「歎逝賦」の本文前に、作者陸機の生い立ちを紹介したのちに、「逝往也、言日月流邁、人世易往、傷嘆是事、因而賦焉」とのように解題している。この世の移り変わりの速さ、人生のはかなさ、むなしさに対する感歎・哀慟が、「歎逝賦」全体に一貫する主題であることを提示している[11]。

伊天地之運流、紛升降而相襲。日望空以駿驅、節循虛而警立。
嗟人生之短期、孰長年之能執。時飄忽其不再、老晼晚而將及。
懟瓊蕊之無徵、恨朝霞之難挹。望湯谷之企予、惜此景之屢戢。

---

[9] 本論での『文選』「歎逝賦」の引用は「六臣注文選」の中で最古の刊本である「足利本」（足利市足利学校遺蹟図書館蔵本）を影印、出版した『日本足利學校藏宋刊明州本六臣注文選』（梁）蕭統選編;（唐）呂延濟等注（北京：人民文學、2008年）に拠る。なお、句読点は筆者が私に付したものである。

[10] 本論での『文選李善注』の引用は「六臣注文選」の中で最古の刊本である「足利本」（足利市足利学校遺蹟図書館蔵本）を影印、出版した『日本足利學校藏宋刊明州本六臣注文選』（梁）蕭統選編;（唐）呂延濟等注（北京：人民文學、2008年）に拠る。

[11] 藤川功和「藤原定家と「歎逝賦」：漢詩句受容の一側面」『古代中世国文学』no.19、2003年6月30日、p.26。

悲夫、川閲水以成川、水滔滔而日度。世閲人而為世、人冉冉而行暮。人何世而弗新、世何人之能故。野毎春其必華、草無朝而遺露。經終古而常然、率品物其如素。譬日及之在條、恆雖盡而不悟。

上引文は「歎逝賦」最初の段落である。友の逝去への哀傷・痛惜の情から天地宇宙の摂理に注目し、「悲夫、川水以成川、水滔滔而日度。世閲人而為世、人冉冉而行暮」とのように、人生の流転を流れていく水に喩えて述べている。水の流れから時の流れを諦観し、世の無常を嘆くという「歎逝賦」の上引文が、平安末期の仏教説話集『宝物集』巻第二や『十訓抄』跋文にも引用されている。『宝物集』巻第二には、「仏なを、死をまぬかれ給はず。いはんや末代の凡夫をや。されば、文選と申文には、水滔々日度　人冉々行暮　何世弗絶新　世何人能故　とは申たるぞかし。誠に水ながれてかへる事なし。死ぬる人かへることなし。名をしるせば昔の人なり。尸を見れば鬼のごとし。つゐに蓬がもとの塵となりて、眼は野べの蕨につらぬかる」[12]とし、『十訓抄』の跋では、「夢なり。幻なり。古人去りて、帰らず。ありとやせむ、なしとやせむ。旧友かくれて、残り少なし。かの文選といふ文に、冉々として、行き暮れぬ。水、滔々として、日々に度るとあるこそ、まことに理なれ」[13]と述べる。両文ではそれぞれ、「『文選』と申文には」「かの文選といふ文に」とのように、出典を明記した形で、「歎逝賦」の「悲夫川閲水以成川、水滔滔而日度。世閲人而為世、人冉冉而行暮」云々という一文を引用しているところからみると、当該文言は、『文選』を好んで摂取してきた平安朝以来の文人たちに広く受容されていたことが確認される。平安朝における『文選』の流布状況を念頭に入れつつ、『方丈記』冒頭の「ユク河ノナガレハ、絶エズシテ、シカモモトノ水ニアラズ」という文と「歎逝賦」の上引文との、発想上の酷似を再考慮するならば、『十

[12] 小泉弘・山田昭全校注『宝物集』巻第二、新日本古典文学大系 40、東京：岩波書店、1993 年、p.90。
[13] 浅見和彦校注・訳『十訓抄』新編日本古典文学全集 51、東京：小学館、1997 年、p.492。

訓抄』に指摘されたとおり、恐らく長明が「歎逝賦」から示唆を得ていた可能性は十分にあると思量される。

三、『方丈記』と「歎逝賦」との類似性（二）

冒頭文のみならず、『方丈記』と「歎逝賦」との類似性は、序章において他に二箇所ほど関連のある叙述が見出される。一つは、『方丈記』の「イニシヘ見シ人ハ、二三十人ガ中ニワヅカニ一人・二人ナリ」という一文と、「歎逝賦」の「懿親戚屬、亡多存寡。暱交密友、亦不半在」「親落落而日稀、友靡靡而愈索。顧舊要於遺存、得十一於千百」という文言との類似性。もう一つは、両文とも槿の花と露を以てはかない現世の喩えにしているところである。

「イニシヘ見シ人ハ、二三十人ガ中ニワヅカニ一人・二人ナリ」という文について、『首書』『諺解』などの古注釈書は、白楽天の「夜深吟罷一長吁　老涙灯前湿白髪　二十年前旧詩巻　十人酬和九人無」という詩句を引用しているが、『流水抄』は『文選』「歎逝賦」序の「余年方四十、而懿親戚屬亡多存寡。昵交密友亦不半在」云々という文を引用し、「爰の文段前後此賦の趣を以て述べられたりと見えたり」と述べている[14]。簗瀬一雄氏は『文選』「歎逝賦」序の上引文言のほかに、『経国集』巻第十雑言の空海の詩、寒山詩、『拾遺集』の和歌をも引き、空海の詩と『拾遺集』の歌・詞書は典拠としての可能性が強いとする[15]。

「歎逝賦」の文言、『経国集』巻十空海の詩[16]、寒山詩[17]、そして

---

[14] 簗瀬一雄『方丈記解釈大成』東京：大修館書店、1987年、p.21。

[15] 簗瀬一雄『方丈記全注釈』日本古典評釈・全注釈叢書、東京：角川書店、1971年、p.27。

[16] 「雑言　入山興一首　釈空海（前略）貴人賤人総死去。死去死去作灰塵。歌堂舞閣野狐里。如夢如泡電影賓。君知否、君知否。人如此。汝何長。（後略）」（『経国集』の引用は續群書類從完成會版『群書類從』全30巻訂正三版をもととした、『群書類從』デジタル版（東京：大空社、1997年）第八輯巻第百二十五所収『経国集』、pp.508-509に拠る。）

[17] 「一向寒山坐、淹留三十年、昨來訪親友、大半入黄泉、漸滅如殘燭、長流似逝川、今朝對孤影、不覺淚雙懸」（（唐）釋寒山撰『寒山詩集』文淵閣四庫全書内電子版、香港：迪志文化出版、2007年。）

『拾遺集』の歌[18]を並べて比較してみると、人間は貴賤を問わずいずれ亡くなり、人生は夢のようなはかないものであるとする空海の詩以外、どのテキストも人の死去を嘆き、残るものがわずかであるという趣旨のもので、互いに似通うところも少ながらず見出される。しかし、その中で、『方丈記』の「二三十人ガ中ニワヅカニ一人・二人ナリ」という一文と同じく、生き残っている友人の数の少なさを数字で具象化し、例示するものが、「歎逝賦」の「顧舊要於遺存、得十一於千百」という一文のみである。安良岡康作氏は「歎逝賦」の中に「親落落而日稀、友靡靡而愈索。顧舊要於遺存、得十一於千百とあるのは、本文中の「所も変らず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人が中に、わづかに一人・二人なり」とあるのと、何らかの関連があるかもしれない」[19]とする。

四、『方丈記』と「歎逝賦」との類似性（三）

『方丈記』序章の末尾に、「ソノ主ト栖ト無常ヲアラソフサマ、イハバ朝顔ノ露ニコトナラズ。或ハ露落チテ花残レリ、残ルトイヘドモ朝日ニ枯レヌ。或ハ花シボミテ露ナヲ消エズ、消エズトイヘドモ夕ヲ待ツ事ナシ」とのように、「ソノ主ト栖ト」は滅んでいくのが早く、如何にはかないものであることを、「朝顔ノ露」に喩えて語っている。古注釈書の『長明方丈記抄』（加藤盤齋著）では、「朝がほの露にことならず、此詞、たとへのことハりの相かなふ事を先いへり。あるハ露おちて花残れり。のこるといへども朝日にかれぬ。此詞、たとへの姿をことハりたり。あるじの人は死て、住家のこるといへども、残りもはてず。住家もやがて無常なりといへり。夕をまつことなし。此詞、住家はなくなりて、主はのこる事あれども、のこりもはてず、主もやがて無常なりといへり」[20]とのように、詳細

[18] 「昔見侍し人々多く亡くなりたることを嘆くを見侍て　藤原為頼　1299 世中にあらましかばと思人なきが多くも成にける哉」『拾遺和歌集』巻二十・哀傷（小町谷照彦校注、新日本古典文学大系 7、東京：岩波書店、1990 年、p.379）。
[19] 安良岡康作『方丈記全訳注』講談社学術文庫、東京：講談社、1980 年、p.23。
[20] 簗瀬一雄『方丈記解釈大成』東京：大修館書店、1987 年、p.27。

に譬喩説を説明している。つまり、「ソノ主」を「露」に、「栖」を「朝顔」に譬えて『方丈記』のテーマである人と住家のはかなさを序章の末尾に念押ししているのである。

「朝顔ノ露」ではないが、「歎逝賦」序章の末尾においても、人の命の短さを、「草の露」及び一日しか咲かない「槿」の花に喩えていう文言が見出される。「悲夫、川閲水以成川、水滔滔而日度。世閲人而為世、人冉冉而行暮」に続いて、「人何世而弗新、世何人之能故。野毎春其必華、草無朝而遺露。經終古而常然、率品物其如素。譬日及之在條、恆雖盡而不悟」とのように、野には春が巡ってくるたびに必ず花が咲くように、人はしだいに年をとり、新しい人と代わっていき、草の上には朝ごとに宿る露が残っていることはないのと同じく、世の中に古い人がい続けることはない、人の命は槿の花のように朝生えて夕べには枯れてしまうようにはかないものなのに、そのことを悟れないのであると述べる。六臣注『文選』ではこの一文につき、「善曰。言命之行逝、譬乎日及。雖至於盡、而不能悟。潘尼朝菌賦曰。朝菌者、世謂之木槿、或謂之日及」「翰曰。悟、覺也。日及、木槿華也。朝榮夕落、漸至於盡、不即覺也」[21]と注するように、ここでは命の逝くことを「日及」に喩えていうが、「日及」とは朝から咲き始め、夕方に枯れてしまう、木槿の花のことである。

『方丈記』序章にいう「朝顔」については、木槿とするか、牽牛子すなわち今日の朝顔とするかで、説が分かれているが[22]、どちらもはかないものの象徴に用いられ、しかも古辞書類や平安朝以降の和歌においてあさがほと槿との混同、混用の事例も多く見出される

[21] 本論での『六臣注文選』の引用は「六臣注文選」の中で最古の刊本である「足利本」（足利市足利学校遺蹟図書館蔵本）を影印、出版した『日本足利學校藏宋刊明州本六臣注文選 』（梁）蕭統選編;（唐）呂延濟等注（北京：人民文學、2008年）に拠る。

[22] 木槿とするものは、『流水抄』、内海『評釈』、竹野『新釈』、山田『宝文館』、田中『校註』、冨倉『評解』、湯本『解釈と鑑賞』、鈴木『笠間』などで、牽牛子とするものは、『宜春抄』徳本『新講』、塚本『通解』、永田『新講』、中島『解釈叢書』、浅尾『新解釈』、武田『解釈法』、土田『全釈』、日栄社『要説』、三木『傍線解釈』、簗瀬『全注釈』などである。（簗瀬一雄『方丈記解釈大成』東京：大修館書店、1987年、p.29。）

ところを念頭に入れ、考慮するならば、「歎逝賦」の「野每春其必華、草無朝而遺露。經終古而常然、率品物其如素。譬日及之在條、恆雖盡而不悟」という一文と、『方丈記』の「ソノ主ト栖ト無常ヲアラソフサマ、イハバ朝顔ノ露ニコトナラズ。或ハ露落チテ花残レリ、残ルトイヘドモ朝日ニ枯レヌ。或ハ花シボミテ露ナヲ消エズ、消エズトイヘドモ夕ヲ待ツ事ナシ」という文言とはともに、あさがほ（槿）と露とを取上げ、それを以て現世の無常を強調する点は、恐らく単なる偶然ではないように思われる。

（一）あさがほと槿との混同

『日本国語大辞典』第二版では、「むくげ」と「あさがお」について、それぞれ以下のように説明している[23]。

> むくげ【木槿・槿】アオイ科の落葉低木。中国、インド原産で、観賞用に生垣や庭木として植栽される。高さ約三メートル。幹は灰白色。葉は柄をもち卵形で三裂し、縁に粗い鋸歯（きょし）がある。夏から秋にかけ、径五～一五センチメートルの五弁花が咲く。花は朝開いて夜しぼみ、淡紅・白・淡紫色などがある。果実は卵円形で熟すと五裂に裂ける。漢方ではつぼみを乾燥したものを木槿花（もくきんか）と呼び、煎じて胃腸カタルや腸出血に用いる。<u>一説に、古く「アサガオ」と称したのは、この花をさしていたという</u>。漢名、木槿。はちす。もくげ。ゆうかげぐさ。学名は Hibiscus syriacus 《季・秋》
>
> あさ-がお［：がほ］【朝顔】ヒルガオ科の一年草。アジアの原産で、日本で園芸植物として発達し、江戸時代、嘉永・安政年間（一八四八～六〇）には非常に多くの品種が作られ、薬用としては平安時代初期から栽培されていた。茎は左巻きのつる性で物に巻きつき、長さ二メートル以上になる。全体に粗い逆毛が生えている。葉はふつう三裂し、長い柄があり、互生する。

[23] 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編集『日本国語大辞典』第二版、東京：小学館、2000 年。なお、引用文中の下線は筆者が私に付したものである。

夏の早朝、直径一〇～二〇センチメートルのじょうご形の花を葉腋（ようえき）に一～三個つける。花は早朝開花し、午前中にしぼんでしまう。花の色は品種によって白、紅、青、紫など。また、それらが交じりあって縞や絞りの模様をつくるものもある。にほんあさがお。しののめそう。牽牛花（けんぎゅうか）。かがみぐさ。蕣花（しゅんか）。学名は Ipomoea nil →朝顔の。《季・秋》

また、古辞書では、以下のように解説している。

『新撰字鏡』[24]「蕣　館閏反　木槿」[25]

『倭名類聚抄』[26]「蕣　文字集略云　蕣音舜和名木波知春　地蓮花　朝生夕落者也」[27]

『類聚名義抄』[28]観智院本「槿　音謹、アサカホ、シフシ、予柄椵也古作堇櫬也」[29]

『類聚名義抄』観智院本「蕣　音舜　キバチス　アサカホ」[30]

『字鏡集』[31]「槿　アサガホ・アツマル・シフシ」[32]

---

[24] 「日本人の手に成る現存の古辞書のうち、平安時代前期の編纂にかかる最も代表的な漢和辞書。昌住の撰。昌住の序によれば、本書は寛平四年（892）に草案三巻が成り、さらに増補を加えて昌泰年中（898-901）に一応成稿したという。」(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』東京:吉川弘文館、1979-1997年。)

[25] 京都大学文学部国語学国文学研究室編『天治本・新撰字鏡』京都:臨川書店、1967年、p.435。

[26] 「意義分類体の辞書。源順撰。承平年間（931-938）成立。」（国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』東京：吉川弘文館、 1979-1997年。）

[27] 中田祝夫編『倭名類聚抄　元和三年古活字版二十巻本』東京：勉誠社、1978年、p.918。

[28] 「部首分類漢和辞書。現存諸本には、原撰本・改編本の二種がある。（一）原撰本　永保元年（1081）以後、十一世紀末ごろ成立か。（中略）撰者は未詳だが、引用書の範囲から見て、法相宗の僧侶と推定される。注文にヲコト点（喜多院点）を加点しているから、この写本が法相宗関係の僧侶の手に成った可能性が大きい。（二）増補本系　観智院本（天理図書館蔵、国宝）が唯一の完本。（中略）巻末に建長三年（1251）の沙弥顕慶の書写奥書があるが、実はこれは本奥書である。その前に仁治二年（1241）釈子慈念の書写本奥書があり、賀茂の庵室で作者自筆草本により写したとあるが、慈念は空観房如実の本名であり、真言宗金剛院流の僧であるから、改編本の撰者は真言宗の学僧だった可能性が大きい。」（国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』東京：吉川弘文館、 1979-1997年。）

[29] 正宗敦夫編『類聚名義抄―佛下』東京:日本古典全集刊行会、1938年、p.109。

[30] 正宗敦夫編『類聚名義抄―法下、僧上』東京:日本古典全集刊行会、1938年、僧上 p.6。

『倭名類聚抄』の上記解釈は恐らく、『説文解字』巻一下・艸部「蕣：木槿朝華暮落者」[33] という説明を受けてのものかと思われるが、『類聚名義抄』や『字鏡集』では、「槿」と「あさがほ」とを同一視していたことが明らかである。古辞書は典拠を明記していないので、「槿」は「あさがほ」であるとするその説の由来も不明であるが、『後撰和歌集』[34]では、「槿」と「あさがほ」とを同一とする和歌が見出されることに注目されたい。

ひとり侍けるころ、人のもとより「いかにぞ」ととぶらひて侍ければ、あさがほの花につけてつかはしける

よみ人しらず

1288 夕暮のさびしき物は槿の花をたのめる宿にぞありける

（『後撰和歌集』巻第十八・雑四）

これは、暮れは男の来訪が期待できずつらいから、早く朝になればいいと、朝顔の花が咲く朝を待っていると詠む女の歌と思われるが、詞書によると、一人でいるところに、「いかがでしょうか」と尋ねられたので、「あさがほの花」と一緒に贈ったものであるという。ここで注意されたいのは、詞書には「あさがほの花につけて」と述べつつも、和歌では、漢字の「槿」として表記し、詠われたところである。つまり、平安中期、『後撰和歌集』が成立した天暦七年頃（953年）[35]では、すでに「槿」と「あさがほ」とを同じ物として看做し

---

[31] 部首分類体の字書。菅原為長編か。七巻、または二十巻。寛元三年（一二四五）以前の成立。異体字が多くあげられ、漢字の音・和訓が豊富・多様である。七巻本には寛元三年書写本などがあり、二十巻本には応永二十三年（一四一六）・二十四年書写本、白河本（白河楽翁（松平定信）旧蔵）などがあるが、部首数においても、内容の上でも異同が大きく、別書と扱った方が良いほどである。（国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』東京：吉川弘文館、1979-1997年。）

[32] 中田祝夫・林義雄著『字鏡集白河本寛元本研究並び総合索引』第一冊白河本影印篇、東京：勉誠社、1977-1978年、p.190。

[33] 『説文解字』文淵閣四庫全書電子版、香港：迪志文化出版、2007年。

[34] 本稿での引用は、藤原定家天福二年書写本を江戸時代に透写した国立歴史民俗博物館蔵（高松宮旧蔵）本を底本とした、『後撰和歌集』新日本古典文学大系6（片桐洋一校注、東京：岩波書店、1990年、p.390）に拠った。

[35] 『日本国語大辞典』第二版では、『後撰和歌集』について「天暦五年（951）、村上天皇の勅命で和歌所が置かれ、藤原伊尹が別当に、大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城のいわゆる梨壺の五人が撰者となった。成立は

ていたことが確認される。また、『拾遺和歌集』巻第三・秋・155 番歌「君来ずは誰に見せまし我が宿の垣根に咲ける槿の花」について、新日本古典文学大系では、下句の「槿」という漢字を「あさがほ」とのように読み方がつけてある[36]。五・七・五・七・七の五句体の歌体に即して詠めば、「むくげのはな」ではなく、下句の「槿の花」を「あさがほのはな」と詠むべきだという判断であろう。『拾遺集』155 番歌の作者が読人不知であるが、平安時代において「槿」を「あさがほ」と読む事例として把握しておくべしと思われる。

『和漢朗詠集』は藤原公任の手により編集され、同じ趣の漢詩と和歌とを並べている詩歌集として広く知られているが、『朗詠集』には「槿」の漢詩と「あさがほ」の和歌とが並べてあることにも留意されたい[37]。同書巻上・秋・槿の項に、漢詩文と和歌をそれぞれ二首収録している。漢詩文の二首は「槿花」「槿籬」を書き綴るのに対し、和歌の二首は「あさがほの花」「あさがほ」を詠んだものである。撰者である藤原公任は、「槿」と「あさがほ」とを区別せずに同じものとして受けとめていたかどうかは即断できないものの、「槿」の詩と「朝顔」の和歌を同じ項目に集めたことの影響を受けたか、「伝後水尾院御訓点本」（寛文八年筆、享保十四年写）[38]では「槿」という題について、「アサガホ」とのように訓がつけてある。

平安後期の『堀河院御時百首和歌』『和泉式部続集』などの歌集では、詞書に「槿」や「槿花」としつつ、実際に詠われたものは「あさがほ」であるという事例も見出される[39]。『堀河院御時百首和歌』は平安後期、堀河天皇のとき、源俊頼、源国信らが中心に、当時の

天暦七年頃か」と解説する。

[36] 小町谷照彦校注『拾遺和歌集』新日本古典文学大系 7、東京：岩波書店、1990 年、p.46。

[37] 田中みどり「古代のアサガホ－朝顔、桔梗、槿、昼顔、のあさがお説の検討」『京都語文』 18、2011 年 11 月、p.240。

[38] 江戸前期の御物粘帖本の複製本の「解説并釈文」に掲載。菅野禮行校注・訳『和漢朗詠集』新編日本文学全集 19、東京：小学館、1999 年、凡例に参照。

[39] 『和泉式部続集』「よの中はかなき事などいひて、槿花のあるをみて　394 はかなきは我が身なりけりあさがほのあしたの露もおきてみてまし」（新編国歌大観編集委員会編『新編国歌大観』DVD-ROM 東京都 ： 角川学芸、2012 年）。

有力歌人に詠進させた百題による百首歌(組題百首)の集成である。長治二年（1105）から同三年頃奏覧。作者は藤原公実・基俊、大江匡房、源国信・俊頼、祐子内親王家紀伊、前斎宮河内らで、伝本によって一四人から一六人まで数が異なるが、和歌史上最初の大規模な組題百首の試みとして後代に規範とされ、題詠、習作の際に取り組む形式として尊重されていた。内容面でも、新しい歌題には堀河朝歌壇の新風が多様に反映して、時代色の断面をうかがわせている。『堀河院太郎百首』『堀河院初度百首』『堀河院百首』などの名称もある。そのうち、秋廿首の中で「槿」という題が設けられているが、歌の中で詠まれるものはすべて「あさがほ」である[40]。

実際、筆者が『新編国歌大観』で調べてみたところ、『堀河院御時百首和歌』『和泉式部続集』以外に、「槿」で表記しつつも、「あさがほ」と詠む文例が少なからず見出され、しかも『朗詠集』以降に著しく多く存することが確認される。[41]これは恐らく、「槿」の漢詩と「あさがほ」の和歌とが並べてある『朗詠集』からの深い影響を受けたためかと想定されるが、平安朝以来の文人たちは、「あさがほ」を「槿」という文字で表すことがあるということが如上の考察により確認され、もしかしたら「槿」と「あさがほ」とを同一物として理解していた可能性も極めて高いかと思われる。

---

[40] 『堀河院百首和歌』秋廿首・槿「公実　753 あしがきのひまよりみえし槿はおも影さらぬ花にぞ有りける」「匡房　754 しら露とおきてみつれば程もなくおもがはりする槿の花」「国信　755 山ざとのしののあせ戸のひまをあらみ明けてぞみつる槿の花」「師頼　756 槿もうらやまれけりとしふれどまだ花さかぬ人のためには」「顕季　757 浦風に浪やおるらむ夜もすがらおもひあかしの朝がほの花」「顕仲　758 世のうさを思ひしれとや朝がほのさきてはかなき程をみすらん」「仲実　759 あだにのみみつつぞ過ぐる軒近きまがきにさける朝がほの花」（後略）。(『堀河院百首和歌』和歌文学大系 15、東京 : 明治書院、2002 年、pp.140-143。)

[41] 例えば、『新撰朗詠集』上・秋・槿「277 起きて見むと思し程に枯にけり露自けなる槿花」「278 在とても憑べきかは世中を知らする物は槿花」(佐藤道生・柳澤良一共著『和漢朗詠集・新撰朗詠集』和歌文学大系 47、東京 : 明治書院、2011 年、P.346)、『長秋詠藻』上「槿　149 咲きてこそ消ゆとも消め露の間もあなうらやまし槿の花」(川村晃生・久保田淳共著『長秋詠藻・俊忠集』和歌文学大系 22、東京 : 明治書院、1998 年、P.29)、『金槐和歌集』巻之上・秋部「槿　風を待草の葉におく露よりもあだなるものは朝顔の花」(風巻景次郎・小島吉雄校注『山家集・金槐和歌集』日本古典文学大系 29、東京 : 岩波書店、1977 年、p.354) などがある。

（二）和歌に詠まれる「あさがほ」

「あさがほ」は早朝に開花するので、寝起きの顔を彷彿とさせる人の顔として古くから和歌に用いられていた。例えば、『伊勢集』「413 春日野のなかのあさがほ面影に見えつゝ今もわすられなくに」[42]、『貫之集』巻第二「210 此宿の人にもあはで朝顔の花をのみみて我やかへらん」[43]、『紫式部集』「4 おぼつかなそれかあらぬか明けぐれの空おぼれする朝顔の花」[44]、『新古今和歌集』巻第四・秋歌・上「貫之　344 山がつの垣にさけるあさがほはしのゝめならで逢ふよしもなし」[45]などである。

また、午前中にしぼんでしまうのが「あさがほ」の特徴で、長くても一日しか持たないというところから、はかない人生の喩えとしてもよく和歌に詠われている。応和元年（961）、源順は 4 歳になる女児を亡くし、同年 8 月、また 5 歳の男児を喪って、無常と悲しみの思いから、古万葉集の沙弥満誓が詠んだ歌の中に「世の中を何に譬へむ」とあることをとって歌の上句において詠み、『源順集』に十首載せている。そのうち、「世中を何にたとへん夕露もまたできえぬるあさがほの花」[46]とのように、夕露ができるのも待たずに、すでに消えてしまう朝顔の花を、はかない世の喩えに詠う歌が見出される。

『源順集』の上引歌のみならず、「あさがほ」を用いて、この世の「はかなさ」を詠んだ例として、平安朝以降に数多く見出される[47]。

---

[42] 平野由紀子校注『平安私家集』新日本古典文学大系 28、東京：岩波書店、1994 年、p.160。

[43] 田中喜美春校注『貫之集』和歌文学大系 19、東京：明治書院、1997 年、p.40。

[44] 中周子校注『紫式部集』和歌文学大系 20、東京：明治書院、2002 年、p.206。

[45] 田中裕・赤瀬信吾校注『新古今和歌集』新日本古典文学大系 11、東京：岩波書店、1992 年、p.113。

[46] 『源順集』の引用は續群書類從完成會版『群書類從』全 30 巻訂正三版をもととした、『群書類従』デジタル版（東京：大空社、1997 年）第十四輯巻第二百四十九所収『源順集』、p.632 に拠る。

[47] 筆者が『新編国歌大観』で調べたところ、『拾遺和歌集』巻第二十・哀傷・1283 番歌のほかに、『相模集』「258 よのなかに思ひくらべてみるをりはひさしかりけりあさがほの花」「358 あさがほのはなにやどれるつゆの身はのどけくものをおもふべきかは」、『後拾遺和歌集』巻第四・秋上「あさがほをよめる　和泉式部　317 ありとてもたのむべきかはよのなかをしらする物はあさがほの花」、『堀河百首』秋廿首・槿「顕仲　758 世のうさを思ひしれとや朝

ここでは平安中期の詠歌例として『拾遺和歌集』巻第二十・哀傷・1283 番歌を取上げてみる。

朝顔の花を人のもとに遣はすとて　　藤原道信朝臣

1283 朝顔を何はかなしと思けん人をも花はさこそ見るらめ

（『拾遺和歌集』巻第二十・哀傷）

『拾遺和歌集』巻第二十・哀傷・1283 番歌は、『古今集』巻第十六・哀傷・「藤原惟幹　860 露をなどあだなるものと思ひけむわが身も草に置かぬばかりを」という歌を踏まえて、朝顔の花をどうしてはかないと思ったのだろうか、人のことだって、花ははかないものと思って見ることだろうと、朝顔よりも人の世の無常を詠んだものである[48]。ここでは、朝顔とははかなさを表象する景物であることが明らかである。同じ歌は、『公任集』『道信集』『今昔物語』巻二四第三八にも収録され、それらの詞書から恐らく正暦三年（992）の夏頃、藤原公任との応酬歌であることがわかる[49]。

消えやすい「露」と、開花時間の短い「あさがほ」とを併用し、この世の「はかなさ」を詠む事例も少なからず見出される。例えば、『好忠集』191 番歌は[50]、「題しらず」として「をきて見んと思ひしほどにかれにけり露よりけなるあさがほの花」（『新古今集』秋上・343）と詠み、「あさがほ」のはかなさを露よりもと強調している。また、『紫式部集』52 番歌は[51]、「世中のさわがしきころ、朝顔を人のもとへやるとて　消えぬ間の身をも知るしる朝顔の露とあらそふ世を嘆くかな」と、消えやすい朝顔の露とはかなさを競うこの世を

がほのさきてはかなき程をみすらん」「永縁　764 世の中のはかなき中にはかなきはくれをもまたぬ槿の花」「紀伊　767 しののめにおきつつをみん朝がほは日影まつまのほどしなければ」、『新古今和歌集』巻第四・秋歌上「貫之　344 山がつの垣ほにさけるあさがほはしののめならで逢ふよしもなし」（『古今六帖』二・読人不知・1322）などがある。

48 小町谷照彦校注『拾遺和歌集』新日本古典文学大系 7、東京：岩波書店、1990 年、p.374。

49 伊井春樹・津本信博・新藤協三著『公任集全釈』東京：風間書房、1988 年、p.299。

50 松本真奈美・高橋由記・竹鼻績共著『中古歌仙集』和歌文学大系 54、東京：明治書院、2004 年、p.35。

51 中周子校注『紫式部集』和歌文学大系 20、東京：明治書院、2002 年、p.216。

嘆いている[52]。

以上は古来、「あさがほ」と「槿」との混用のありかた、そして「あさがほ」が和歌に詠まれてきた象徴的意味を考察してみた。周知の通り、長明は京都下鴨神社の禰宜の家に生まれたが、俊恵の指導で歌人として認められるようになり、『千載和歌集』に入集して以来、歌人としての地位を固め、各種の宮廷の歌会や歌合にたびたび出席し、建仁元年（1201）には後鳥羽院によって再興された和歌所の寄人にも加えられている。その後、『新古今和歌集』に十首入撰され、和歌の才能が評価されている。和歌の素養や漢文学の知識の豊かな長明には、本節で考察したように、『和漢朗詠集』に「槿」の漢詩と「あさがほ」の和歌とが並べてあり、両者がよく混用されていたこと、そして「あさがほ」が人生の「はかなさ」の象徴として古来しばしば詠まれてきた歌材であることなどはよく心得ているものであるとたやすく察せられよう。

五、終わりに

前述したとおり、日本では古くから「槿」と「あさがほ」とを同一視する傾向があり、平安朝以降は、「あさがほ」をはかない現世の喩えとして和歌に詠む事例が多く見出される。貴族社会の伝統的文化の中に成長し、和歌にも長じる長明には、それらの事柄について承知しないはずがない。また、『文選』が古くから日本に将来し、広く受容され、「歎逝賦」の文言が平安末期の仏教説話集『宝物集』や

[52] 筆者が『新編国歌大観』で調べた限りでは、ほかには、『相模集』「358 あさがほのはなにやどれるつゆの身はのどけくものをおもふべきかは」、同「462 はかなさをまづめのまへにしらするはまがきのうへのあさがほのつゆ」、『和泉式部続集』「よの中はかなき事などいひて、槿花のあるをみて 394 はかなきは我が身なりけりあさがほのあしたの露もおきてみてまし」、『堀河百首』秋廿首・槿「匡房　754 しら露とおきてみつれば程もなくおもがはりする槿の花」、同「肥後　766 いつまでかおきてみるべき日影まつ露にあらそふ朝がほの花」、『山家集』中・雑「諸行無常の心を　777 はかなくてすぎにしかたをおもふにもいまもさこそはあさがほの露」、同下・雑「1414 露もありつかへすがへすも思ひしりてひとりぞみつるあさがほのはな」、『新古今和歌集』巻第二十・釈教歌「1917 なにか思ふなにをかなげく世中はただあさがほの花のうへの露」などが見出される。

『十訓抄』にも援用されており、『芸文類聚』[53]『明文抄』などの類書にも「歎逝賦」の一部が抄録されていることから考えると、「歎逝賦」は広く流布しており、平安朝の知識階層に浸透していたことも容易に想像される。

神宮文庫本『明文抄』巻四では、「懿親戚屬亡多存寡。昵交密友、亦不半在。或所曾同遊一塗、同宴一室、十年之外、索然已盡。同悲夫川閲水以成川、水滔滔而日度。世閲人而為世、人冉冉而行暮。同人何世而弗新、世何人能故。同野每春其必華、草無朝而遺露。同辟日及之在條、恆雖盡而不悟。同」[54]とのように、長文であった「歎逝賦」のごく一部しか摘録していないものの、抄録された文言はちょうど、以上に考察してきた、『方丈記』序章の内容ともっとも関連性の密接な三箇所とよく一致しており、つまり、「歎逝賦」と『方丈記』との類似性の見出される点は、すべて『明文抄』の抄文に見つけられ、いわばまとめられたようなものであるところに注目されたい。

『明文抄』五巻は平安末期の儒者藤原孝範の撰述になる厖大な分類漢語章句抄録であり、いわゆる金言佳句や故事成語などを収録した金言集と称する類書に属するもので、貞永年間（1232）頃の成立と見られている[55]。著録の漢籍、国書及び仏典からの引用は凡そ百七十余書、引用の章句は二一一二則余に及んでいる。成立時期は『方丈記』より遅れているものの、採録の章句は博士家に伝わる家伝の

---

[53] 『藝文類聚』巻三十四「晉陸機歎逝賦曰、昔每聞長者追計平生同時親故、或曾共遊一途、同宴一室、十年之外索然已盡、以是思哀、哀可知矣。賦曰、悲夫、川閲水以成川、水滔滔而日度、世閲人而爲世、人冉冉而行暮、人何世而弗新、世何人之能故、亮造化之若茲、吾安取夫久長、痛靈根之夙殞、怨具爾之多喪、悼堂構之隤瘁、愍城闕之丘荒、親彌懿其已逝交、何戚而不亡、彌年時之詎幾、夫何徃而不殘、或冥邈而既盡、或寥廓而僅半、信松茂而柏悅、嗟芝焚而蕙歎、苟性命之弗殊、豈同波而異瀾、年彌徃而念廣、塗薄暮而迫迮、顧舊要於遺存、得十一於千百。」（文淵閣四庫全書電子版、香港：迪志文化出版、2007 年。）なお、句読点は筆者が私に付したものである。

[54] 神宮文庫本『明文抄』の引用は、遠藤光正『類書の伝来と明文抄の研究－軍記物語への影響－』（長野：あさま書房、1984 年、p.620）に拠った。なお、句読点は筆者が私に付したものである。

[55] 遠藤光正著『類書の伝来と明文抄の研究－軍記物語への影響－』長野：あさま書房、1984 年、p.151。

抄本からの抜粋であり[56]、上引した『明文抄』巻四の「歎逝賦」抄録は、平安末朝の文人たちがいかに「歎逝賦」に関心をもち、それを受容した様子を自ら語る重要な文献でもあろう。言い換えてみれば、「歎逝賦」においても、『明文抄』巻四の抄録文言こそが、平安末朝の文人たちにとってもっとも心に響き、感銘を覚えた箇所であると見て差し支えないと思われる。

如上に述べてきた、平安朝における「歎逝賦」の流布や受容のありかたを念頭に置きつつ、「歎逝賦」と『方丈記』序章とにおいて、言葉綴りや思想において様々な近似や関連性の見出されることは単なる偶然ではなかろう。『方丈記』の文章は和漢混淆文の先駆として著名であり、古来その簡潔さが極めて高く評価されてきた。こういう漢文的叙法の成立背景には、構想、素材の模倣や移入が認められた『池亭記』のみならず、もっとも大事な序章において、実は、『文選』「歎逝賦」の「悲夫、川閲水以成川、水滔滔而日度。世閲人而為世、人冉冉而行暮」云々という文言からも甚だしい影響を受けたと考えられる。また、あさがほ（槿）と露を比喩に用いて人生のはかなさを語る手法も容易に看過できないと思われる。むしろ、長明は「歎逝賦」の「野毎春其必華、草無朝而遺露。辟日及之在條、恆雖盡而不悟」という文言に触発され、和歌にもよく詠われていたあさがほと露などの歌語を積極的に用い、それを漢文風の散文体で書き直し、表現したのではないかとも思量されるのである。

『方丈記』が「ゆく河の流れは」と筆を起したのは、「歎逝賦」にうたわれたような抒情や詠嘆たるところをある程度受け継いだのは否定できないように思われ、親族や旧友の急死を目にし、命の脆さを実感し、「哀傷」の情を主に訴える「歎逝賦」の詩文に、長明は自らの生活や心境を重ねていたかもしれない。だが、安良岡康作氏が、「『方丈記』序章には「和歌・和文的詠嘆は影を潜め、単なる情趣の

[56] 遠藤光正著『類書の伝来と明文抄の研究－軍記物語への影響－』長野：あさま書房、1984 年、p.206。

域をはるかに越えた、諦観的、原理的な問題の追求が認められる」[57]と指摘したとおり、長明は『方丈記』の冒頭に自らの世界観を宣言し、生死の問題、無常の問題を提起する際に、漢文学と和歌の伝統との接点に自ら腰を据えていたことに留意されたい。貴族社会で育てられ、和歌に長じ、漢文学の素養も十二分に備えた長明は、それらをよく咀嚼し、内在化することによってより芸術性の高い文章を完成させ、「ユク河ノナガレハ、絶エズシテ、シカモモトノ水ニアラズ」とはじまる『方丈記』の名文を生み出したのである。

参考文献

正宗敦夫編（1938）『類聚名義抄』日本古典全集刊行会

細野哲雄（1965）「『方丈記』と『歎逝賦』」『国文学：解釈と教材の研究』10 巻 9 号

京都大学文学部国語学国文学研究室編（1967）『天治本・新撰字鏡』臨川書店

簗瀬一雄（1971）『日本古典評釈・全注釈叢書　方丈記全注釈』角川書店

久山善正（1977）「方丈記冒頭文の解釈－『しかも』を中心に」『国語国文』46（5）

風巻景次郎・小島吉雄校注（1977）『日本古典文学大系（29）山家集・金槐和歌集』岩波書店

中田祝夫・林義雄著（1977－1978）『字鏡集白河本寛元本研究並びに総合索引』勉誠社

中田祝夫編（1978）『倭名類聚抄　元和三年古活字版二十巻本』勉誠社

国史大辞典編集委員会（1979－1997）『国史大辞典』吉川弘文館

安良岡康作（1980）『講談社学術文庫　方丈記全訳注』講談社

遠藤光正（1984）『類書の伝来と明文抄の研究－軍記物語への影響－』あさま書房

[57] 安良岡康作『方丈記全訳注』講談社学術文庫、東京：講談社、1980 年、pp.21-22。

簗瀬一雄（1987）『方丈記解釈大成』大修館書店
伊井春樹・津本信博・新藤協三（1988）『公任集全釈』風間書房
佐竹昭広·久保田淳校注（1989）『徒然草 新日本古典文学大系（3）方丈記』岩波書店
小町谷照彦校注（1990）『新日本古典文学大系（7）拾遺和歌集』岩波書店
片桐洋一校注（1990）『新日本古典文学大系（6）後撰和歌集』岩波書店
田中裕・赤瀬信吾校注（1992）『新日本古典文学大系（11）新古今和歌集』岩波書店
小泉弘・山田昭全校注 （1993）『新日本古典文学大系（40）宝物集』岩波書店
平野由紀子校注（1994）『新日本古典文学大系（28）平安私家集』岩波書店
續群書類從完成會（1997）『群書類従』デジタル版 大空社
田中喜美春校注（1997）『和歌文学大系（19）貫之集』明治書院
浅見和彦校注・訳（1997）『新編日本古典文学全集（51）十訓抄』小学館
菅野禮行校注・訳（1999）『新編日本古典文学全集（19）和漢朗詠集』小学館
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（2000－）『日本国語大辞典』第二版 小学館
家永香織・久保田淳・辻勝美・吉野朋美校注（2002）『和歌文学大系（15）堀河院百首和歌』明治書院
中周子校注（2002）『和歌文学大系（20）紫式部集』明治書院
藤川功和（2003）「藤原定家と「歎逝賦」: 漢詩句受容の一側面 」『古代中世国文学』19
松本真奈美・高橋由記・竹鼻績校注（2004）『和歌文学大系（54）中古歌仙集』明治書院
『文淵閣四庫全書』（2007）電子版 迪志文化出版

林登順（2008）「由文學《哀傷賦》探析六朝生命意識」「遠東通識學報」第二卷第二期

（梁）蕭統選編；（唐）呂延濟等注（2008）『日本足利學校藏宋刊明州本六臣注文選』人民文學

田中みどり（2011）「古代のアサガホ－朝顔、桔梗、槿、昼顔、のあさがお説の検討」『京都語文』 18

佐藤道生・柳澤良一校注（2011）『和歌文学大系（47）和漢朗詠集・新撰朗詠集』明治書院

新編国歌大観編集委員会（2012）『新編国歌大観』DVD-ROM 角川学芸